

平成 22 年 4 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520144

研究課題名（和文） 現代能楽史の地方展開

研究課題名（英文） Research of the contemporary history of Nogaku in the provinces

研究代表者

西村 聡（NISHIMURA SATOSHI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：00131269

研究代表者の専門分野：中世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学

1. 研究計画の概要

平成 18 年度までの「近代能楽史の地方展開」の研究成果を踏まえ、能楽史研究の対象を近代から現代に広げ、その地方展開の実質を解明する方向で発展させることを目的とする。近代における能楽の保護、後継者の育成という課題が、その後どう克服され、現代的な変容を遂げたか、新たな現代的課題とは何かを、近代研究の成果を生かして、また能楽界・学会の時々々の動向を確認しながら、現代研究に結実させる。能楽史研究の基本資料である番組の収集に努め、番組掲載資料の体系的な把握を進めて、催事の地域的な偏りとその変化を追跡する。現代能楽史の通史的展望を地方、また中央と地方の視点から実現するために、地方自治体史における能楽関連記述の収集と整理を行い、これらの資料に基づく現代能楽史年表の作成に到達する。地方公共の能楽関連施設を訪問して、その沿革や利用実態、普及・振興の具体策などを調査し、地方自治体史の能楽記述の内容を検証すると共に、現代能楽史研究の方法を確立するための分析を行う。調査の対象を施設や施策等、文献以外にも拡大し、さらに伝統文化の継承と保存、地域振興などの研究も視野に入れることで、総合的な能楽史研究の在り方を問い直す意義を明確にする。

2. 研究の進捗状況

地方史における能楽史記述の探索は、勤務先附属図書館所蔵分に限っては、大方、その所在が確認できた。当該地方の能楽が活況を呈していたとして、それが時間の経過の中で

変化しないとは限らず、また状況に比例した記述が地方史編纂の中で確保されるとは限らないこと、これらの事実がむしろ現代能楽史、地方能楽史の解明すべき課題となることを再認識した。たとえば研究代表者自身も『金沢市史』の編集・執筆に参加したが、執筆を求められたのは近世分のみであり、近現代の地元能楽界の活況が周辺の地方史研究者には知られていないことを痛感した。同時代のことは対象化しにくい事情もあるが、伝統芸能の現在を把握する試みは絶えず更新される必要がある。次に、比較的研究の進んだ近世の地方能楽史研究において、たとえば加賀藩時代の能楽には藩主が江戸に滞在中の藩邸での催しや江戸城での演能も含まれるべきであるが、そうした視点からの記述は乏しく、近現代においても、能楽師たちの流出と流入、その原因、流出先での活躍、他地域との交流などには十分な調査や考察が行われていないことがはっきりした。その限界を補うところに本研究推進の意義があるとの思いを改めて強くした。諸橋権之進以後の同家の消息が判明したことはこの点での収穫である。第三には人的交流だけでなく、舞台や面・装束など物的側面からの変遷を追跡することも重要であることが、能楽関連施設の訪問調査等により、さらに明確になった。由緒ある舞台の再利用、それができない場合の代替施設、地域振興の一環としての利用や少子高齢化による利用者の減少など、他の時代にも類例が見いだせる傾向と現代特有の現象の両方があり、平成 18 年度までに推進した研究計画「近代能楽史の地方展開」との対比が有効であると確信した。現代能楽の活性化、あるいは継承の危機を、能楽師自身は

どう考えているか、また戦後以降の論調はどうか変遷したかを、最終年度の報告書にまとめる準備に入ったところである。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

本研究計画に関連するプロジェクト「金沢大学連携融合事業：日中両国における無形文化遺産保護と新文化伝統創出に関する共同事業」(平成19年度～平成23年度)に参加して、様々な研究分野の様々な研究方法を学び、本研究計画の推進に有益な視点や材料に気づけたことが大きい。本研究代表者自身もこの事業やその周辺の企画(泉鏡花記念館や新潟県立歴史博物館等)で講演を行い、その過程で計画時点では想定し得なかった近現代能楽史の地方展開の具体的な事象に出会うことができた。また、その延長で、金沢の能楽関係者の多くが眠る菩提寺の全性寺を調査させていただき、明治中期まで活躍した最後の諸橋権之進家のその後のことが子孫の方によって整理されていることを知り、貴重な資料を拝借・閲覧できたこともありがたかったし、講演の御縁により現代能楽史の番組資料や長くその人物像が不詳であった吉倉惣左についての情報などが入手できた。これらの理由により、おおむね順調に進展していると判断した。

4. 今後の研究の推進方策

研究計画の最終年に当たり、地方自治体史における能楽史記述を元にした現代能楽史年表の作成を完成することが最重要課題と考えている。能楽催事の情報膨大なので、まずは地方自治体史に記述された範囲に限定して、出典を明記した現代能楽史年表を完成することを目的として研究を推進する。この年表からは地方自治体ごとの催事の分布とその変遷が見えてくるであろう。能楽の盛んな地域とそうでない地域の分布とその変遷が把握されるだけでなく、地方自治体史にはそれらについての分析や資料が記述・掲載されているはずであり、参考になると同時に、しかし能楽が盛んであるか否かとは別に、能楽史記述や資料掲載にどれだけの分量を割けるか、地方自治体史の中にどう位置づけるかは、当然一様でなく、記述される能楽側と記述する執筆者側の両方の傾向が浮かび上がる点で、本研究計画に有益であると確信される。ただ、地方自治体史はその編纂が完成した時点から年数を経るに従って、とくに現代史の部分は新たな問題が次々に生じて、具体的には平成21年度に調査したいいくつか

の神社の舞台がそうであったように、ここ2、3年で発表や稽古の場として利用されなくなることがあり、その背景には少子高齢化や経済状況の悪化などがあるものと推察される。こうした最近の傾向は、実際に現地で聞き取り調査などをしないと把握できない。最終年度においてもなるべく多くの能楽関連施設を訪問して、現状の把握に努め、地方自治体史の記述を補うことを心掛けたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

1. 西村 聡, 文禄三年の能楽事情と『太閤記』 - 高野参詣 の上演をめぐる一考察 -, 金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇, 2号(2010), 1-9, 査読無
2. 西村 聡, 宗教劇から人間劇へ - 鬼を救い生を語る能の流れ, 国文学解釈と鑑賞, 74巻10号(2009), 101-112, 査読無
3. 西村 聡, 加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組 - 前田家三代利常治藩期を中心に -, 能と狂言, 7号(2009), 31-37, 査読無
4. 西村 聡, 元和・寛永期加賀藩邸御成能番組集成 - 加越能文庫蔵御成記録を主として -, 金沢大学国語国文, 34号(2009), 188-195, 査読無
5. 西村 聡, 綾鼓 研究の現在 - 「元雅新作」は 恋重荷 を超えたか -, 金沢大学文学部論集, 28号(2008), 37-50, 査読無

[学会発表](計1件)

1. 西村 聡, 加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組 - 三代前田利常治藩期を中心に -, 第7回能楽学会大会, 2008年5月18日, 早稲田大学(東京都)